

水田地帯における肉用牛経営の実態と問題点

尾 崎 正 美

(宮崎県総合農業試験場)

OZAKI, M.

A Research of Beef Cattle Farming in the Paddy Field Area.

本県の1戸当り平均水田面積は約42aで、100a以上の水田を所有している農家は、全農家の10%にもみたくないという零細性を示している。従って米だけを商品生産している農家は、全国平均より22%も低い約14%で、多くの農家は稲作を基盤にして他の部門を結びつけた複合経営の段階にある。いわゆる「水稲プラスアルファ型営農」が主軸をなしているといえる。こんご産地形成が進むにともない地域農業は、アルファ部門の比重を高めながら経営の分化を進めていくであろうが、その場合の改善方向とそれに応じた経営方式を確定するためには、本県農業の主軸をなしている「水稲プラスアルファ型営農」の現状と問題点を明確にしておかねばならない。このような視点から、水田率の高い地域で水田利用と直接結びついている本県の代表的成長部門である乳用牛、肉用牛、ハウスやさいについて昭和43年から44年にかけて調査を実施中であるが、その中の早期水稲地帯における肉用牛(生産)経営方式について43年の調査結果を報告する。

調 査 結 果

1. 調査集落の肉用牛飼養状況

調査集落、串間市羽ヶ瀬の肉用牛飼養状況は、表1のとおりである。

第1表 水田面積、肉用牛飼養規模別戸数

	100a 以下	101~ 150	151 200	201a 以上	計	備 考
0頭	4戸	4戸	2戸	—	10戸	①農家戸数 30戸
1~2	8	2	2	2	14	②1戸当り平均耕地面積 水田 110a
3~4	—	1	—	—	1	畑 25a
5~6	—	3	2	—	5	③水 田 率 81%
計	12	10	6	2	30	④二期作水稲普及率 90%
経営形態	水 稲 + 兼 業 α 部門	水 稲 + α 部門 兼 業	水 稲 + α 部門	水 稲 中 心		⑤タバコ作農家 7戸 ⑥酪 農 家 3戸

一般的にいつて、水稲作部門だけでは生計を営んでいけない水田面積規模 150a 前後の階層に、プラスアルファ部門としての肉用牛(生産)の多頭化傾向がみられる。

2. 水 田 利 用

一期作水稲(品種はコシヒカリが主体)は4月下旬に田植が行われ、7月下旬から8月上旬にかけて収穫され、引きつづいて二期作水稲の田植となり、11月中旬に収穫されている。水稲作中心の農家の水田利用は一期作水稲—二期作水稲であるが、肉用牛、乳用牛飼養農家では、水田裏作として一部に飼料作物(イタリアンライグラスが主体)が作付されている。一期作水稲後地にイタリアンが作付される場合は9月上旬に播種されるが、二期作水稲後地の場合は水稲立毛中に中まきされている。

3. 粗飼料生産と給与

肉用牛の飼養頭数が5~6頭規模になってくると、水田裏作の飼料作付も多くなり、1頭当り延作付面積も20~30aとなっている。一部二期作水稲を排除し一期作水稲後地に直ちにイタリアンを作付し、年内に1~2回刈取り、4月下旬までに4~5回の青刈り利用を行っている。この場合のイタリアンは10a当り6000kg以上の収量をあげているが、次の一期作水稲の田植がおくれ5月上旬となる。二期作水稲への中まきの場合、イタリアンは3月上~中旬に一回刈り利用されるだけであり、収量の期待はできず10a当り1500kg程度と推定された。夏期の粗飼料対策としては畑地に青刈りとうもろこしが作付されているが、その面積も僅かであり、水田の青刈りイタリアンライグラスの生草量の多い時期を除いては一般に粗飼料の不足をきたしている。また、貯蔵飼料生産も殆んどなく、季節的不均衡な給与となっている。

4. 労働力利用

水稲作中心の農家では農業 働の繁閑の差が大きく、労働のピークは一期作水稲収穫と二期作水稲植付の8月上旬を最高に一期作水稲田植の4月中旬、二期作水稲収穫の11月中旬となっている。この時期は当然、自家労働力だけでは不足し、ゆい、手伝い、臨時雇で対処している。肉用牛の多頭飼養農家でも水稲部門の労働ピークは同じであるが、遊休労働がなく年間を通じて労働力の利用がなされている。

5. 農業投下資本

調査集落の中で最も肉用牛飼養規模の大きかった6頭飼養農家の農業、肉用牛部門の投下資本額をみると、表2のようである。

第2表 農業、肉用牛部門の投下資本額

種 目	農業投下資本額 (A)	肉用牛部門投下資本額 (B)	比率 ①/②		備 考
			円	%	
土地	4,800,000	2,760,000	56.9	57.5	10a 当り水田30万円 畑20
建物	783,750	783,750	16.2	100.0	
施設	19,000	19,000	0.4	100.0	
大農具	184,760	51,760	1.1	28.0	
大家畜	1,057,500	1,057,500	21.8	100.0	生産牛 6頭
計	6,845,010	4,672,010	96.4	68.3	
流動財資本	249,576	174,145	3.6	69.8	
計	7,094,586	4,846,155	100.0	68.3	
生産牛1頭当り		807,693			

農業投下資本額に占める肉用牛部門投下資本額は68%と大きく、485万円となっている。生産牛1頭当りでは約81万円、土地を除く資本財資本額でも34万8千円となっている。肉用牛部門への投下資本額の構成割合は、土地が最も大きく、次いで大家畜の22%となっている。大農具は殆んど水稲部門への資本装備であり、肉用牛部門への利用は僅か1%にすぎない。

6. 農業経営の成果

上記肉用牛6頭飼養農家の農業経営の成果をみると、表3のとおりである。

水稲部門の所得は約64%の71万円、肉用牛部門が30%の約32万円、両部門で100万円以上の所得となっている。

肉用牛部門の経営費の内訳をみると、表4のようである。

第3表 農業経営の成果

部 門	面積又は頭数	粗収益	経営費	所得	所得割合	所得率
		円	円	円	%	%
水 稲	一期	120 a	670,864			
	二期	93	302,133			
	計	213	972,997	265,155	707,842	64.2
	水田10a 当り	81,083	22,096	58,987		
計しよ	30 a	110,000	36,568	73,432	6.7	66.8
	10a 当り	36,568	12,189	24,477		
肉用牛	6 頭	714,000	393,514	320,486	29.1	44.9
	1頭当り	119,000	65,586	53,414		
合 計		1,796,997	695,237	1,101,760	100.0	61.3

第4表 肉用牛部門の経営費内訳

費 目	経 営 費							粗 収 益	所 得	
	種 苗	肥 料	購 入 飼 料	光 熱 水 費	賃 料 々 金	償 却	其 他			
種 苗 (円)	4,580	34,820	108,930	5,472	88,710	137,432	13,570	393,514	714,000	320,486
生産牛1頭当り (円)	763	5,803	18,155	912	14,785	22,905	2,262	65,586	119,000	53,414
割合 (%)	1.2	8.8	27.7	1.4	22.5	34.9	3.4	100.0		

経営費の中では、肉用牛、畜舎などの償却費、購入飼料費、販売手数料、種付料などの賃料々金が大きく、この3つで経営費全体の85%を占めている。

問 題 点

肉用牛部門をさらに拡大発展させるためには、①、良質粗飼料の多量生産がまづ重要となる。それには、二期作水稲を排除し、一期作水稲後地の全面的、合理的利用による粗飼料生産と、多肥栽培による収量の増大を図らねばならない。二期作水稲の排除は労働ピークの解除にもなり、さらに肉用牛の多頭化を促進するものと思われる。畑地は当然夏期の粗飼料対策として全面飼料畑化すべきである。②、水田地帯であるため、季節的に粗飼料の不足がみられるが、上記生産と同時に貯蔵飼料の生産がとくに重要である。③、以上のように粗飼料を充分確保し、購入飼料の節減をはからねばならない。④、集落の水田は乾田が多いのに、二期作水稲が栽培されるので一期作水稲後地は排水が悪く、飼料作物の作付が困難となっている水田が多い。肉用牛、乳用牛飼養農家による飼料作物の集団栽培が必要である。